

〈研究ノート〉

## 『ギルガメシュ叙事詩』の新文書 ——フンババの森と人間——

渡辺和子

### はじめに

『ギルガメシュ叙事詩』（標準版）第5書板の新文書が2014年に公刊された（Al-Rawi/George 2014）。<sup>1)</sup> それによって、この叙事詩の魅力がさらに深まったと同時に研究課題も増えた。その中には、人間と自然の関係、また都市文明と野生との関係についてこの叙事詩の立場を再考するという課題も含まれている。

### 1. 自然破壊は批判の対象か

「世界最古の長編叙事詩」とされる『ギルガメシュ叙事詩』を、「人間による自然破壊に対する批判を含む世界最古の作品」とみなすことは不可能ではない。しかしそれは現代にあるような環境破壊、地球温暖化などの視点からの批判ではないはずである。ここでは標準版の『ギルガメシュ叙事詩』を扱うが、それは紀元前1100年頃までに、それ以前のギルガメシュに関する伝承をまとめて編纂されたものと考えられている。

堆積平野であるメソポタミアでは、支配者たちが自らの権勢を顕示する巨大建造物建設のために遠くの産地に遠征して石材や木材を調達しようと試みていた。『ギルガメシュ叙事詩』の主人公は、メソポタミア南部の都市国家ウルクの王ギルガメシュであり、その盟友で「野人」のエンキドゥと共に、はるか北西のレバノン山地に赴いて、杉の森を守る精霊フンババを殺害して大量の杉を伐採し、それらを筏に組んでユーフラテス河を流し下る。ウルクに帰還したギルガメシュは、この「武勇」によって「英雄」として喝采を浴びるが、神々の目にはこの武勇は暴挙と映った。



新文書 (Suleimaniyah Museum T.1447 = SB Gilg. V MS ff) の粘土板 (写真) とアル・ラーウィによるハンドコピー (上段が表面、下段が裏面)。11 x 9.5 x 3 cm。出典 : Al-Rawi/George 2014, 87-90。表面の左側の第1欄に1-46行が残り、その右隣の第2欄に61-103行が残る。さらに右には第3欄があったが欠損している。縦方向に粘土板を回転させて裏面を出すと、は右から第4欄 (欠損している)、第5欄 (249-276行が残る)、第6欄 (300-324行が残る) の順に読んでゆく。

## 2. 新文書

第5書板には、ギルガメシュとエンキドゥがフンババの森の入り口に立ったところから、フンババを殺害し、大量の杉を伐採して帰るところまでが書かれている。これまで知られていた第5書板を記した粘土板文書（テキスト）を合わせて再構成しても（George 2003, 602-615）、かなりの欠損部分を含むが、全部で302行あると推測されていた（George 2003, 615）。新文書の出現によって、現在では324行あるとされる。しかしそれは、今後の発見によって変更される可能性もある。新文書が含む行は、「欠損部分」によって隔てられる次の4つの部分に分けられる。

(1) 1-46行 (2) 61-103行 (3) 249-276行 (4) 300-324行

(1) と (2) は表面に、(3) と (4) は裏面に書かれている。それぞれに詳察が必要であるが、本研究ノートでは (1) 1-46行に焦点を合わせて考える。<sup>2)</sup>

## 3. フンババの森の前で

### 3.1. 邦訳

はじめに新文書（「N」とする）1-46行の邦訳（私訳）を示す。

- 1 [彼らは] 森を [見上げて立ち尽くしていた。]
- 2 [杉の] 高 [さをじっと見上げていた。]
- 3 [森への入] 口を [見つめていた。]
- 4 [フンババが] 行き来するところに跡ができ、
- 5 [通り道は] よく踏み固められてよい道になっていた。
- 6 [彼らは] 杉の [山を見ていた。]
- 7 それは神々の棲家、女神たちの座所。
- 8 杉は豊かさを [地の面] に与えていた。
- 9 日陰は [心地] よく、明るさにあふれていた。
- 10 とげのある草が茂り、森の覆いとなっていた。

11 杉とバツルックの木々が〔密集して〕入る隙間がなかった。  
12 1 ベールにわたって、若枝〔を出した〕杉（の木立が）続いていた。  
13 糸杉〔の…〕は3分の2ベールにわたって続いていた。  
14 杉は60キュービットの高さ〔まで〕（樹液の）塊をつけていた。  
15 樹液は流れ出て雨のように降り注いでいた。  
16 〔(そして)流れ下って(?)〕峡谷が運んだ。  
17 1羽の鳥が森全体に（通る鳴き声で）鳴きはじめた。  
18 〔…〕は答えて、叫び声をあげた。  
19 〔一匹の(?)〕のセミがかまびすしい音を立てた。  
20 〔…〕は賛美の声をあげ、盛大に祝っていた。  
21 ヤマバトはさえずり、キジバトは答えて鳴く。  
22 コウノトリの〔鳴き声に〕森は歓喜し、  
23 シャコ（キジ）の〔叫び声〕に豊かな森は大いに喜ぶ。  
24 〔母サル〕は大声で歌い、子ザルはキーキー叫ぶ。  
25 音楽家と太鼓奏者(?)の〔一団のごとく、〕  
26 彼らは毎日フンババの前で大音響をとどろかせる。  
27 杉がその影を落とし、  
28 〔恐〕怖がギルガメシュに落ちた。  
29 〔鳥肌〕が彼の腕を〔捕え〕、  
30 すくみが彼の足を襲った。  
31 〔エンキドゥは〕彼の口を開いて語り出し、  
ギルガメシュに言った。  
32 「〔さあ、〕森の中に〔入ろう!〕  
33 〔あなたの手を開〕け!そして戦いを始めよう!」  
34 〔ギルガメシュ〕は彼の口を開いて語り出し、  
エンキドゥに言った。  
35 「私の友よ、〔なぜ〕私たちは臆病者のごとく震えているのか?  
36 〔私たちは〕、あらゆる山を越えてきたのではないか?  
37 私たちの前に〔…〕…?  
38 〔…〕私たちは光を見るだろうか?」  
39 私の〔友〕は戦いを熟知している者であり、  
40 格闘を体験してきた者であって死を恐れない。

- 41 あなたは [血] を塗り付けてきたのであり、死を恐れない。  
42 [怒り狂え！ そしてアーピ] ルの [ごとく] あなたの意 [識を]  
変化させろ！  
43 [あなたの叫びが太鼓のごとく大きく響くように。]  
44 [あなたの腕から鳥肌が失せるように。] あなたの足 [からすくみ  
が去るように。]  
45 [私の友よ、互いに (手を) しっかりつかめ！ 私たちは一人のよう  
になって…]  
46 [あなたの心が戦] い [に向かうように。]  
(欠損)

### 3.2. 注釈

[…] 内は原文の欠損部分、…は欠損していないが判読不明な部分、( ) 内は理解しやすくするために補った言葉を示す。

1-13: 最初の 13 行はこれまで知られていた第 5 書板のテキスト H<sub>1</sub> (これまでの H、注 2 参照) 1-12 と同じであることがわかる (George 2003, 603-605)。すなわち N 13 が H<sub>1</sub> 12 にあたる。しかし H<sub>1</sub> 12 は半分ほどの欠損があり、H<sub>1</sub> 13-15 には解読可能な文字がほとんど残っていない。そして H<sub>1</sub> 16 以降は欠損している。しかし 30 行以降はテキスト H<sub>2</sub> (これまでの AA、注 2 参照) によってある程度補うことができる。実質的には N 13-30 は初めて読むことができた行である。

8-26: 新文書によって明らかになったことのうちには、このような自然讃歌がメソポタミア文学のなかにあったという驚くべき事実がある。フンババの森は極めて豊かであり、植物が隙間なく茂り、さまざまな鳥、セミ、サルの声が大音響をたてている。その様子がフンババの前で行われる音楽隊の演奏にたとえられている。ジョージが指摘するように、フンババはその森であたかも王侯のようにかしずかれている (Al-Rawi/George 2014, 74 参照)。<sup>3)</sup> この箇所においてフンババは決して下等でも野蛮でもなく、驚嘆すべき豊かな森で、「文化的」に、尊重されて暮らしていることが示されている。

12: 1 ペールは 2 時間で歩ける距離をさすが、ここでは約 6 キロメートルと解する。

14: 1 キュービットは約 50 センチメートルとされるため、60 キュービッ

トは約 30 メートルになる。

19: 欧州ではイタリアにセミがいるが、それより北の諸国にはいないせいか、アッカド語についての英語やドイツ語の辞書に「セミ」はなく、「コオロギ」とされる。ジョージは「セミ」*zizānu* を“*cicada*”ではなく“*tree cricket*”と訳す。Al-Rawi/George 2014, 84 参照。

29-30: 「苦しむ義人の詩」として伝わる作品に並行箇所がある (Lambert 1975 (orig. 1960), 42-43, Ludlul II 77-78)。Al-Rawi/George 2014, 84 参照。後述の 44 も参照。

42: アーピル (*āpilu*、文字通りには「答える者」) はシャーマンの一種であり、ここで筆者は「アーピルのごとくあなたの意識 (*tēmu*、正気、理性、判断力) を変化させろ！」と訳すことがふさわしいと考えるが、これはシャーマニズム研究にとっても重要である。当時から、この種のシャーマンがトランス状態 (変性意識状態) で神の言葉などを人々に伝えると考えられていたことになる。

44: 「鳥肌」(*mangu*) は筆者の試訳である。辞書では湿疹、疱疹のような皮膚に出る病状とされるが、恐怖に襲われた時に腕の皮膚に出る現象としては「鳥肌」であろう。また、足に出る現象としては「すくむ」「がくがくと震える」などが考えられるが、ここでは「すくみ」(*lu'tu*) としておく。辞書にある「脆弱さ」の一つといえる。

45: ここでは「つかみ合せ！」という命令形があるが、二人で一緒に戦おうという意味であるので、つかめるのは互いにせいぜい片手ではないか。いずれにしても、ギルガメシュは一人では動けなくなっているが、ここでも虚勢をはっている。足がすくんで動けないので引っ張ってほしい、あるいは怖いので手をつないでほしいということかもしれないが、言葉としては、二人が並ぶことで体を大きく見せてフンババに立ち向かおうと提案しているのであろう。

## 4. 「臆病者」は誰か

### 4.1. 「ト書き」

現時点での 1-46 行の最大の問題は 31-46 行におけるギルガメシュとエンキドゥの会話にあると筆者には思われる。それは「臆病者」は誰かという

問題でもある。

『ギルガメシュ叙事詩』のような作品では（おそらく他の文学作品でもほぼ同様と思われるが）、誰が誰に対して発している言葉であるかが、読者と聴衆にとって明確にわかることが肝要である。そのために、この叙事詩の編者は多くの文字数を使って、たとえば「エンキドゥは彼の口を開いて語り出し、ギルガメシュに言った」（N 31）、「ギルガメシュは彼の口を開いて語り出し、エンキドゥに言った」（N 34）のような「ト書き」を置いて、その後に直接話法で語られた言葉を書いている。ところがジョージは、次に示すようにこの鉄則を崩す読みを提示している。

#### 4.2. ジョージの解釈

N 28-30 において「[恐怖が] ギルガメシュに落ちた。[鳥肌] が彼の腕を [捕え]、すくみが彼の足を襲った」とあるように、恐怖に襲われたのはギルガメシュであってエンキドゥではない。エンキドゥが続いて「[さあ、] 森の中に [入ろう！ あなたの手を開] け！ そして戦いを始めよう！」(N 32-33) と言っていることから、エンキドゥは恐怖感をもっていないと考えられる。しかし、その次にはギルガメシュが「私の友よ、[なぜ] 私たちは臆病者のごとく震えているのか？」(N 35) と言う（下線：渡辺）。確かに原文では「私たち」と第1人称複数形の動詞が用いられているが、ジョージはこれについて「書き間違い」であることを疑っている。そしてジョージの翻訳では、38行目の後に「エンキドゥは答えた」を、さらに44行目のあとに「ギルガメシュ」を挿入する次のような提案をしている。

- 27 杉がその影を落とし、  
28 [恐] 怖がギルガメシュに落ちた。  
29 [鳥肌] が彼の腕を [捕え]、  
30 すくみが彼の足を襲った。  
31 [エンキドゥは] 彼の口を開いて語り出し、  
ギルガメシュに言った。  
32 「[さあ、] 森の中に [入ろう！]  
33 [あなたの手を開] け！ そして戦いを始めよう！」  
34 [ギルガメシュ] は彼の口を開いて語り出し、

エンキドゥに言った。

- 35 「私の友よ、[なぜ] 私たちは臆病者のごとく震えているのか？  
36 [私たちは]、あらゆる山を越えてきたのではないか？  
37 私たちの前に […] …？  
38 […] 私たちは光を見るだろうか？」  
《エンキドゥは答えた。》  
39 私の [友] は戦いを熟知している者であり、  
40 格闘を体験してきた者であって死を恐れない。  
41 あなたは [血] を塗り付けてきたのであり、死を恐れない。  
42 [怒り狂え！ そしてアーピ] ルの [ごとき] あなたの意 [識を]  
変化させろ！  
43 [あなたの叫びが太鼓のごとく大きく響くように。]  
44 [あなたの腕から鳥肌が失せるように。] あなたの足 [からすくみ  
が去るように。]  
《ギルガメシュは言った。》  
45 [私の友よ、互いに (手を) しっかりつかめ！ 私たちは一人のよう  
になって…]  
46 [あなたの心が戦] い [に向かうように。]

原文ではエンキドゥの言葉 (N 32-33) とギルガメシュの言葉 (N 35-46) が1回ずつであるが、ジョージによれば「ト書き」なしでもう1回ずつ言葉を発していることになる。この解釈は一見すると矛盾がないように見えるが、果たしてそうであろうか。

#### 4.3. 新しい解釈の試み

これは『ギルガメシュ叙事詩』全体の理解にも関わる問題であり、にわかには正解を提示できるわけではないが、現時点での反論を試みておきたい。

第1点は、前述したように「ト書き」は重要である。しかしジョージは『ギルガメシュ叙事詩』の数箇所ですら「ト書き」の省略があるとしている (I 224, V 305-306 and VII 235, Al-Rawi/George 2014, 84)。しかしこの問題について論じるには標準版『ギルガメシュ叙事詩』の全行を精査する必要がある。この叙事詩はある編者 (たち) がまとめたと考えられる。たとえば



「ギルガメシュは言った」と書いている、あるいは語っているのは編者であるが、決して「編者は言った」という「ト書き」はない。また、誰かの発話は必ず直接話法で記される。Aの発話のなかにBの発話が直接話法で書かれることもしばしば起こる。すでに筆者が指摘したように、第1書板では登場人物の狩人やシャムハトが、彼らの「予知」による「予言」のなかで、すなわち彼らの直接話法の言葉のなかに、他の人々の発話が直接話法で記されているため、極めて複雑な構成になっている（渡辺2014、64-71参照）。

第2点は、ギルガメシュが「私たち」（N 35）と言っていることが重要である。たとえギルガメシュが一人で恐怖に震えていたとしても、ギルガメシュ自身がそれを認めたくないために、二人とも震えているかのような発言をしたとは考えられないか（しかし後述するように、エンキドゥも震えていた可能性がある）。

そもそもギルガメシュがフンババ殺害を思い立ったのは、野人エンキドゥを友として得たからである。ギルガメシュはエンキドゥと初対面で取っ組み合い、その直後にフンババ殺害の冒険に誘っている（II 201; George 2003, 566-567）。しかしエンキドゥは、フンババは最高神エンリルが定めた「天命」として、「人々の恐れ」とされているという理由で反対した（II 219a; George 2003, 566-567）。それに対してギルガメシュは「私の友よ、なぜあなたは臆病者のごとく語るのか」（II 232）と言い返している。

フンババの森の入り口に立った二人のうち、恐怖に襲われたのはギルガメシュであるが、虚勢をはるのもギルガメシュである。そしてエンキドゥは、ギルガメシュの武勇伝のために助力しなければならない存在である。

第3の、最重要論点は、N 39-42の「私の[友]は戦いを熟知している者であり、格闘を体験してきた者であって死を恐れない。あなたは[血]を塗り付けてきたのであり、死を恐れない。[怒り狂え！そしてアーピ]ルの[ごとき]あなたの意[識を]変化させろ！」という言葉である。もしこれをジョージが考えるように、エンキドゥが王としてのギルガメシュに対して言っているならば、ギルガメシュが正規軍を率いて敵と戦う場合を指すであろう。そうであるならば、指揮官として戦うのであって、接近戦で返り血を浴びることはない。何よりもここでは、シャーマンとしてのアーピルへの言及が重要である。ギルガメシュは都市文明の中で育ち、自分自身の夢解釈も母である女神ニンスンに、旅に出てからは野人エンキドゥに頼ってきたこ

とを考えるならば、シャーマンとは程遠い存在である（渡辺 2014、72-78 参照）。ここではむしろ、エンキドゥがかつて荒野で生活していた時に——具体的には書かれていないが、必然的に——猛獣に襲われそうになれば格闘したり、毛皮を剥いで身にまとったりしたことを指していると考えらるべきであろう。それだけではなく、エンキドゥにはシャーマンのような資質があり、体に（動物の）血を塗り付けて変性意識状態になれることを指していることになる。<sup>4)</sup>

したがってこれらの言葉によってギルガメシュはエンキドゥに対して、フンババと戦うために、その本性としての野性を発揮するように命じていると考えられる。他力本願の冒険であるが、それを認めたくないギルガメシュが虚勢をはってエンキドゥを叱咤激励している。自分には鳥肌とすくみがあっても、エンキドゥにはあってはならないという身勝手な命令である。

最後に俯瞰的に考えると、ギルガメシュがフンババ殺害を企てたのは、エンキドゥという強い友人を得たこともあるが、それ以上に、死すべき存在として後世に名を残そうとしたからである。ところがエンキドゥは最初から、エンリルの「天命」を犯すことに罪悪感があった。N 265-272 (=第5書板のテキスト dd 181-189//dd 240-245, George 2003, 610-613) には次のようにある (271-271 行は N では省かれているが、上記テキスト dd の並行箇所によって補完する)。

- 265 エンキドゥは口を開いて語りだし、  
[ギルガメシュに言った。]  
266 「私の友よ、[杉の森の守] 護者であるフンババを、  
267 彼をやっつけろ！ 彼を殺せ！ [彼の意識 (*tēmu*) をなくせ！]  
268 フンババ、杉の森の守護者、[彼をやっつけろ！ 彼を殺せ！ 彼の  
意識をなくせ！]  
269 最 [高のエンリル] が (それについて) 知る前に、  
270 そして [偉大な神々が] 怒る前に。  
271 ニップルのエンリル、[ラルサ] のシャマシュ、[…]  
永遠の [伝説 (?)] を打ち立てよ、[…]  
272 いかにしてギルガメシュが [恐ろしい (?)] フンババを殺した  
のか。」

エンキドゥには、フンババ殺害には抵抗があったが、ギルガメシュを助けると決断してからは忠実な僕であった。しかし、なるべくなら神々には知られないように、あるいは時間がたってから、すなわち、ギルガメシュの武勇伝が成立した後に神々が知るようにと願っていたようである。エンキドゥの方も、「フンババを殺せ！」といいながら、心のうちは複雑であり、後で下されるエンリルからの罰を恐れていたことになる。互いに「私の友よ」と呼びかけ合う二人であったが、明らかな上下関係があった。

これらの論点を総合すると、N 35-46 は原文通りにすべてギルガメシュの言葉と解する方が矛盾が少ない。

そしてこのギルガメシュの言葉には続きがある。第5書板に属すると判明したH<sub>2</sub>のテキストでは、第1欄がさらに7行続くため、ギルガメシュの言葉も次のようにあと4行続くことがわかる。

- 47 死を忘れて生を [求めよ！]  
48 [...] …慎重な人間。  
49 先に行く者はその身を守り、彼の相棒を安泰にするように。  
50 彼らこそ [将] 来、名を打ち立てることになる。』<sup>5)</sup>

## おわりに

エンリルが定めたフンババの「天命」を暴力的に変更したことへの罰は、エンキドゥへの死の宣告であった。エンキドゥ自身もその定めを受け入れることは簡単ではなかった。エンキドゥはレバノン山地に向かう前からこのような恐るべき結末を予感していたはずである。そして森の前に立った時には、結末の恐ろしさに震えたとしても不思議ではない。ギルガメシュの「私の友よ、なぜ私たちは臆病者のごとく震えているのか？」(N 35) という言葉は、二人とも恐ろしさに震えてはいたが、それぞれ何を恐れているかが違っていたことになる。しかしながらギルガメシュにとって後のエンキドゥとの死別はもっとつらいものになってゆく。

多くの助けを得ながら、蛮勇をふるってフンババを殺害したギルガメシュであるが、彼自身にとっての死の問題は「飼いならされて」いなかった。

フィリップ・アリエスは「飼いならされた死」がかつてあったと論じたが（アリエス 1990、1-23）<sup>6)</sup>、そのはるか昔に、全く「飼いならされていない死」について、そしてその問題に文字通り命をかけて取り組む人間について語る文学があったことになる。ギルガメシュは決して自らに妥協することなく、たった一人で地の果てに赴き、帰還する（渡辺 2011）。これこそが「英雄的快挙」であったかもしれないが、喝采を望んでのことではなかった。

古代メソポタミアでは、たとえ紀元前 1500 年頃であっても、当時の都市文明の中に生きる人々はすでに 1500 年ほどの都市文明史を経たあとの世界に生きていたことになる。すでに自然や野生は遠く、支配者にとっての死の克服は英雄として名を残すことであった。しかし古代文学としては珍しく、『ギルガメシュ叙事詩』（標準版）は極めて覚めたまなごしをもっている。古代人であっても当然ながら、乗り気ではないが上司の命令であるのでしぶし



ギルガメシュとエンキドゥに殺害されるフンババ。石板レリーフ（前10-9世紀）、テル・ハラフ（現在はシリア）出土。パピロニアの『ギルガメシュ叙事詩』が当時の古代西アジアに広まっていたことを示す。62.2 x 42 x 16 cm。ボルティモア、ウォルターズ美術館蔵。

ぶ従う言動をしたり、自信がないからこそ強がって見せたりしていたはずである。人間の心理に鋭く切り込む編者が、「英雄的快挙」遂行中の「虚勢」の描写に行数を費やした意図が何であったかに、現代の読者は思いを馳せるべきではないか。

第5書板は最初からフンババの森の豊かなあり方をほめたたえている。そのため、その「森を荒地としてしまった」（N 303; Al-Rawi/George 2014, 82-83）とされる二人は悪事をなしたことになり、間接的には自然破壊批判が含まれているといえる。しかしそれ以上に、自らのなかの自然と分裂した存在としての都市文明人への警告を読み取ることができる。

## 注

- 1) ここで「新文書」(Suleimaniyah Museum T.1447)とされるものは、イラクのスレイマニア博物館(クルディスタンに位置する)に所蔵されていた粘土板であり、その内容が『ギルガメシュ叙事詩』第5書板であることが、2011年にアル・ラーウィによって確認された(Al-Rawi/George 2014, 69)。筆者はこの新文書を、本学生涯学習センター2015年度後期の『ギルガメシュ叙事詩』の講座で読むことにした。それぞれの解釈を示して刺激を与えてくれた受講生に感謝したい。
- 2) 新文書の発見に伴って、これまで第4書板の最後の部分(第5-6欄)を記すと言われていたテキストAA(K 8591)が、正しくは第5書板の第1-2欄を記していることが判明した。これについては長い論争があったが、決着がついたということである(Al-Rawi/George 2014, 69-72)。そして第5書板の第1-2欄の上部を残しているテキスト(H)と同じ粘土板の下の部分とされた。両者は直接接合しないが、MS H<sub>1</sub> (+) H<sub>2</sub> (これまでのHとAA)として新たに同じページに正しい欄数と行数を付記して掲載されている(Al-Rawi/George 2014, 73)。
- 3) “The most interesting addition to knowledge provided by the new source is the continuation of the description of the Cedar Forest, one of the very few episodes in Babylonian narrative poetry when attention is paid to landscape. The cedars drip their aromatic sap in cascades (ll. 12-16), a trope that gains power from cedar incense’s position in Babylonia as a rare luxury imported from afar. The abundance of exotic and costly materials in fabulous lands is a common literary motif. Perhaps more surprising is the revelation that the Cedar Forest was, in the Babylonian literary imagination, a dense jungle inhabited by exotic and noisy fauna (17-26). The chatter of monkeys, chorus of cicada, and squawking of many kinds of birds formed a symphony (or cacophony) that daily entertained the forest’s guardian, 𒂗𒍪. The passage gives a context for the simile “like musicians” that occurs in very broken context in the Hittite version’s description of Gilgameš and Enkidu’s arrival at the Cedar Forest. 𒂗𒍪’s jungle orchestra evokes those images found in ancient Near Eastern art, of animals playing musical instruments. 𒂗𒍪 emerges not as a barbarian ogre and but as a foreign ruler entertained with music at court in the manner of Babylonian kings, but music of a more exotic kind, played by a band of equally exotic musicians.” Al-Rawi/George 2014, 74 から引用。
- 4) 「テムム」(*tēmu*)には「正気、理性」の他にも「知識、情報」などの意味もある。

また動詞の「変わる／変える」と結びつく場合もあるが、辞書では「狂気の状態にある、なる」と解釈されている。CAD Š1, 1989, p.406; CAD T, 2006, pp.95-96 参照。「アーピル」(*āpilu*)については、CAD A2, 1968, p.170 参照。しかし、これらの事柄をシャーマンのトランス状態についての研究と結びつけることは今後の課題である。

- 5) H<sub>2</sub>のテキストは上述したように第4書板に属するテキスト AA とされていたために、この4行の翻字と英訳も IV 245-248 (George 2003, 600-601) にある。
- 6) アリエスは『死を前にした人間』の第1章「飼いなされた死」の最後に次のように記している。「私がこの親密な死を、飼いなされた死と呼ぶ時、私はそれによって死がかつては野性的であったが、その後飼いなされたと言おうとしているのではない。逆に、死は以前は野性的ではなかったのに、今日に至って野生化したと言いたいのだ。飼いなされていたのは、昔の死に方だったのである」。アリエス 1990、23 頁。

## 参考文献

- アリエス、フィリップ 1990: 『死を前にした人間』(成瀬駒男訳) みすず書房(原著: Philippe Ariès, *L'homme devant la mort*, 1977)。
- 渡辺和子 2011: 「ギルガメシュの異界への旅と帰還—「英雄」と「死」」東洋英和女学院大学死生学研究部編『死生学年報 2011 作品にみる生と死』リトン、135-164 頁。
- 2014: 『ギルガメシュ叙事詩』における夢とその周辺—予知・夢解き・冥界幻視・無意識』河東仁編『夢と幻視の宗教史』下巻(宗教学論叢 18)、リトン、59-106 頁。
- Al-Rawi, Farouk N. H./George, Andrew R. 2014: “Back to the Cedar Forest: The Beginning and End of Tablet V of the Standard Babylonian Epic of Gilgameš,” *Journal of Cuneiform Studies* 66, 69-90.
- CAD: *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*.
- Fleming, Daniel E./Milstein, Sara J. 2010: *The Buried Foundation of the Gilgamesh Epic: The Akkadian Huwawa Narrative*, Leiden.
- George, Andrew R. 2003: *The Babylonian Gilgamesh Epic*, I-II, Oxford.
- Lambert, W. G. 1975: *Babylonian Wisdom Literature*, Oxford (orig. 1960).